

## カンボジア

# 豊かなものを守る

## サンボーの人々の美しさ、成し遂げてきたもの、そしてその戦い

ジョナサン・コーンフォード (Manna Gum)、チュオン・ラー (オックスファム・オーストラリア)

本稿は、NGO オックスファム・オーストラリアと Manna Gum がカンボジア、サンボー地区の人々の暮らしとその活動をつづった「Preserving Plenty」の部分翻訳である。オックスファム・オーストラリアの活動する豊かな自然に恵まれたサンボー地区。そこに暮らす人々は、土地紛争など様々な問題と直面しつつも、懸命に生活の向上を目指している。今、ここに更に大きな変化—メコン本流ダム建設—が持ち込まれようとしている。計画されているサンボーダムは、人々に更なる闘いを強いる可能性がある。

### はじめに

カンボジアの多くの地域で、人々は岐路に立ち、住民の生活に重要な影響を与える選択肢や課題に直面している。サンボー地区も、そのような地域のひとつである。本書の目的は、サンボー地区にどのような人々が暮らし、また、彼らがどのように生活しているのか、彼らがどういった課題や希望を抱えているかを伝えることにある。本書は、調査報告書や専門的研究書ではない。カンボジア国内でも、そして国際的にも、貧困と開発に関する専門的・政策的論議は活発に行われている。そのような状況で常に必要なのは、複雑な選択肢やジレンマに対し、人間性という角度から取り組むことだ。本書がサンボー地区住民を代弁しているとはまでは言わないが、彼らの意見を伝える役割を果たせるよう願っている。

本書は、著者が2009年7月にインタビューや意見交換を行った際の記録に基づいてサンボー地区にある3つの村の生活を紹介するものである。著者の一人であるチュオン・ラーは、この地域で10年以上に亘ってコミュニティー開発に携わっており、最近もサンボー地区の開発問題に関する学術的な調査を行った。もう一人の著者であるジョナサン・コーンフォードは、この地区を何度も訪れて調査を行っている。本書では、こうした調査の結果も考慮されている。

インタビューは、シンプルなオープンエンドの形で行い、どのような生活しているのか、生活の中で何が大切か、ここ10年間で彼らの生活がどのように変わってきたか、その変化はなぜ起きたのかを質問した。また、将来に対する彼らの希望や不安についても聞いた。著者たちはサンボー地区の人々の生活を楽しく学んだので、読者にも本書を楽しんでほしい。また、著者たちは、インタビュー等を通して私達の共有する人間同士のつながりに気づかされたので、読者にもそれが伝わってほしいと考えている。

### イントロダクション：豊かな大地

「サンボー」という言葉は「豊か」を意味する。サンボー地区の人々は、互いに寛容で、楽しい生活を送っており、この名前は、まるでそのような生活に人々を招き寄せているかのようだ。また、この名前は、多くの人々の需要を満たすに十分な豊かさがそこにあることを示しており、人々が豊かな

生活を送り、他者と共存し、さらに自然とも調和する形で生活するという理想を想起させる。

この理想は、サンボー地区である程度まで実現している。援助ドナーは、同地区について、平均日収が1米ドル強の、医療・教育水準が依然として低い貧しい地区であると述べているが、これはそこに住む多くの人々の生活を的確に表すものとはいえない。本書で紹介するように、同地区には、充実

#### 著者

ジョナサン・コーンフォードは、15年間に亘ってメコン地域（特にカンボジアとラオス）の開発を調査している。政治経済/国際開発で博士号取得。妻および子ども2人とメルボルンに住む。Manna Gumの共同創設者である。

チュオン・ラーはオックスファム・オーストラリアで最も経験豊かな開発ワーカー。カンボジア在住。1993年以来、オックスファムの地域開発プログラムを実施。水工学分野での経験があり、開発管理分野で修士号取得、Earth Rights Mekong スクールを卒業。妻および子ども2人とカンボジアタケオ県に住む。

し、満ち足りた素晴らしい生活がある。そして、大部分の人々にとって、生活はより良いものとなっている。

しかし、豊かさにも条件や限界があり、現在のサンボーはその限界を超えつつある。住民の一部にとっては、豊かさは

すでに消えてなくなり、不安を伴う困窮という悪夢がそれにとって替わった。他の住民たちにも、同様の状況に立たされるかもしれないという不安が亡霊のようにつきまとっているだろう。



写真提供：オックスファム・オーストラリア 撮影：Glenn Daniels

## サンボー地区：自然環境と住民

サンボー地区は、カンボジア中・東部のクラチエ (Kratie : クロチェの方がよりクメール語音に近いが、一般的な表記を取った) 州最大の地区ある。北はスウトウレン (Stung Dtremg) 州、西はコンポントム (Kompong Thom) 州、そして東は国境のモンドルキリ (Mondul Kiri) 州に隣接し、北から南に流れるメコン河にまたがるような形になっている。メコン河が同地区の活力であり、住民 5 万人の大部分はその土手沿いか、この地域に特徴的な大きな島に住んでいる。島々の中で最大のもは全長 43 キロメートルのコッ・ロギュー (コギュー島) であり、そこには 4 つの村がある。同地区の農地の大半は、メコン河回廊に沿ってのびている。

東側には高速 7 号線が地区を通り抜ける形でメコン河と平行に南北に走っており、スウトウレン (最終的にはラオスまで) と、クラチエ町 (最終的にはプノンペン) をつないでいる。サンボーのこの地域は最近まで森林に覆われていたが、伐採がさかんに行われて森林は消えた。

サンボーの人々は概して古い習慣に従って生活しており、土地、河、森の資源に大きく依存している。80% 以上の人々

が小自作農業に従事し、自らが消費する食料を生産している。また、人によって量に差はあるが、地元の市場で販売するための食料も生産している。稲作、牧畜 (牛、バッファロー、豚、鶏)、漁業、森林資源の採取が経済の 4 つの柱であり、この地区のほとんどの世帯が 4 つのうちの少なくとも 3 つに携わっている。

ここには少数民族が比較的多く、人口の約 30% が非クメール族 (Phong, Kuy, Mil, Thoune) である。こういった部族の中には、Kuy 族のように、クメール族の言語、文化、農業の中に統合されているものもあり、仏教信仰や水田稲作農業がその特徴となっている。一方、Phnong 族などのように、伝統的な森林での米の移動式耕作 (しばしば焼畑耕作とも呼ばれる) を行い、独自の言語を話し、精霊信仰を持ち続けている部族もいる。

Phnong 族の森林耕作を別にすれば、同地区の稲作の大半は雨水だけに頼る水稲であり、灌漑はごくわずかに行われているに過ぎない。



写真提供：オックスファム・オーストラリア 撮影：Glenn Daniels

## サンボー地区の生活 サンフィン村

サンフィン村は Koh Regniew と呼ばれる島にある。この島は、メコン河のこの地域にある島々のなかで最大のものである。

サンフィン村は大きな村で、1,246 人が 242 世帯に住んでいる。村は、島の南西部の土手沿いに 5 キロメートル以上に亘って線状に存在する。

村には繁栄の兆しも見られ、トタン屋根が取り付けられたチーク材の新しい住居が数多くある。しかし、依然として粗末な住居も多い。村には寺、小学校、そして小さな中学校があるが、医療施設はない。オックスファムがサンフィン村で活動を開始したのは 1996 年だった。

## 河は絶えず変化し続ける ライ・サートのストーリー

### 平均的な 1 日

Lai Sa-at が朝 5 時に起きて最初にするのは、漁網を掴んで、家の裏手 30 メートルにある河に向かうことだ。網は船から下ろすか土手から投げるかして、たっぷり 1 時間ほど漁を行ったら、家に帰って簡単な朝食をとる。それからバツ

ファローを集めて畑に連れて行き、縄でつないでから土地を耕し始める。

膝まで泥につかり、バツファローが動き続けるように誘導して午前中を過ごす。昼頃には家に帰り、まず泥まみれの服で河に入る。作業服を脱いで洗った後、家に帰って家族と昼食をとる。昼食後は、日中の暑さを避けて家の中で漁具を修理したり鶏小屋を作ったりといった軽作業を行う。

午後遅く、また土地を耕す。稲作もこの時期を過ぎれば少しは楽になる。夕方、Lai Sa-at は河に戻って汚れを落とす。このときの洗濯は漁も兼ねており、仕掛けておいた罾や網を確認する。時間があれば船を出し、網を投げて漁をする。その間、孫たちが周りで水をバシャバシャさせながら、手伝ったり遊んだりする。こうして孫たちは、無意識のうちに魚や漁について学んでいく。

この後、やっと自宅で夕食をとる。その日捕った魚を食べ、Lai Sa-at の一日の仕事が終わる。

農業をする漁師、それとも漁をする農民？

ライ・サートは漁師なのか、それとも農民なのか？彼にとっては意味のない質問である。両方とも家族の需要を満たすのに必要不可欠だからだ。

ライ・サートは毎日漁に出かける。それもたいてい 1 日 2 回だ。雨季には、刺し網、罾、釣り糸と釣り針、投網等さまざまな方法を使って、できるだけ多くの魚を捕まえる。乾季には罾は使わない。



写真提供：オックスファム・オーストラリア 撮影：Glenn Daniels

ライ・サアートの家族は彼も含めて4人で、全員、毎食魚を食べ、4人でだいたい0.3から0.5キログラム消費する。これが1日の全たんぱく質摂取量となる。ライ・サアートは、残った魚があればそれを村で売っており、月額平均約50,000リエル(12.50米ドル)の収入を得ている。消費も販売もされずに余った魚は発酵させて、クメール料理に欠かせないプラホックというペーストにする。

漁業は難しくなってきた。10年前、ライ・サアートはたった1時間で10キログラムの魚を捕まえることができていたのに、今ではせいぜい1キロか2キロしか獲れない。これはなぜなのか。ライ・サアートは、彼が言うところの「違法な漁」が原因だと考えている。大きく、目の細かい網を、下流やトンレ・サップ湖で川幅いっぱいにはねて行う漁が特に問題だそう。ライ・サアートはこのような漁が魚の遡上や産卵を妨げると感じている。

一方で、河自体も変化しているという。土手の浸食が進み、新しい島ができて、淵が埋まってきている。Lai Sa-atは、自分の経験から、土手沿いの森林伐採と河を行き交う大量の高速船がこのような変化の一因に違いないと考えている。また、セサン、スレポック、セコン河(メコン河最大の支流)の上流でダムが建設されていることも知っており、これも影響を与えていると感じている。

### 現在そして将来の生活

ライ・サアートは、以前に比べて生活が良くなったと感じている。サンフィン村では、オックスファムとカンボジア村落開発チームという2つのNGOが活動しており、村にいろいろな利益をもたらしてきた。医療トレーニング、助産トレーニング、公衆トイレ、新しい農業技術のトレーニング、学校、米銀行、バッファロー銀行、予防接種、バイオガスストーブなどがその例である。

ライ・サアートは、特に女性の生活が改善されたと評価している。例として、トレーニングを受けた助産師のおかげで

出産がより安全になったことや、バイオガスストーブのおかげで女性が料理や薪集めにかかる時間が大幅に減ったことを挙げる。家族の衛生状態も大幅に改善され、結果として家族の健康状態、特に子どもたちの健康状態が改善された。

ライ・サアートは将来について楽観的である。過去10年間に多くの変化や状況の改善があり、支援も引き続き行われているのだから、今後もそうなるに違いないと考えている。Lai Sa-atは、特に、子どもたちの教育環境がさらに改善されることを望んでいる。教育が、地域にとっての希望の星だからだ。

一方、建設中のサンボーダムについては懸念を抱いている。彼が初めてこのダ

ムのことを知ったのは、2007年に中国の調査隊が河でドリルを使用しているのを見たときだ。ライ・サアートはダムがどんなものか知らなかったが、河が塞がれてしまえば全てが破壊されることはわかっていた。そうなれば、家族がどうすべきか想像もつかない。ダムに関する会議に呼ばれたなら、地元の人々に影響を与えずにダム建設ができるかどうか質問し、もしできないのならダムを作るべきではないと言うつもりだ。「私たちは電気を必要としていない。必要なのは住む家と食べ物だけだ」。

## 多様である事は安全を保障する事

### チャン・ヌンのストーリー

チャン・ヌンは51歳で、ちょうど学校に通う年頃の子ども3人と生活している。他の4人の子どもは結婚して独立した。3年前、チャン・ヌンの夫はマラリアによる肝臓疾患で亡くなり、彼女が家計を全て背負うことになった。楽ではないが、子どもからの援助もあって、彼女の家庭にはある程度の「充足感」がある。

### 多様な生計手段を持つことの重要性

チャン・ヌンは、家計を支えるうえで一つの手段に依存しておらず、これは、サンフィン村、そしてサンボー全体の大半の住民について言えることである。チャン・ヌンはさまざまな活動を行っており、その全体が彼女の「生計手段」となっている。主な活動は、稲作、果物・野菜の栽培、畜産(鶏、豚、バッファロー)、そして子供たちが土手でする釣りである。

稲作については、収穫が多い年であれば約5から6トンの米を生産する。この量なら、家族と豚の食料を確保したあとも少し余分があり、それを売ることができる。去年は収穫が少なく、一年間家族を食べさせるに十分な米がなかった。

ここ数年は、慎重に鶏と豚を飼育し、そこからの収入で家族の必需品を買えるようにしている。チャン・ヌンの計算によると、去年は豚の販売のみで50万リエル(125米ドル)の収入を得た。チャン・ヌンとその家族が自ら鶏や豚を食べることはほとんどない。食べてしまうには、価値がありすぎるからだ。

目立たないけれども重要な果物と野菜の栽培、そして子どもたちががんばって捕ってくる魚も無視できない。どちらも収入とはならないが、その分の食料を買わなくて済むし、チャン・ヌンと子どもたちが健康を維持するうえで必要な栄養が補われる。米でお腹は膨れるかもしれないが、それだけでは十分な栄養がとれない。

チャン・ヌン家のような片親の家族では、誰かが健康を害するとさまざまな問題が生じうる。子どもたちが重い病気になるれば、サンボー町にある病院まで船で連れて行かなければならないが、彼女は自分の船を持っていないので船代が必要となる。医療費も、現金収入で何とか生きている人々にとっては気が遠くなるほど高額だ。払えなければ民間の貸金業者から借入れなければならず、それは多くのカンボジア人にとって、貧困への下降スパイラルの始まりだ。仕事を休む余裕などないにもかかわらず、こうした事情すべてがチャン・ヌンの仕事を妨げる。

チャン・ヌンにとって、多様な生計手段を持つことの重要性は、強調してもしすぎることはない。家族が食料にも事欠くような状態で、ひとつの活動に依存するのはリスクが高すぎる。雨が降らないかもしれない、家畜が病気になるかもしれないなど、チャン・ヌンの生活には常に不安定な要素がある。生計手段のいずれかに問題が生じた場合に備え、他の手段を持っているのだ。

## 現在そして将来の生活

チャン・ヌンは、彼女とその家族の将来について楽観的である。過去5年間、彼女はオックスファムとカンボジア村落開発チーム(CRDT)からなんらかの支援を受けてきた。こういった支援は些細なようだが、家族の生活を支えるうえで大きな役割を果たしている。例えば、村の他の住民と同様、彼女はオックスファムからトイレと水をろ過する瓶を受け取ったが、こうしたもので家族の健康状態が大きく改善された。CRDTから受け取った鶏を使って始めた養鶏は、今では彼女の多様な生計手段の重要な一部となっている。さらに、オックスファムを通じて豚とバッファローにワクチンを投与することができた。簡単な処置で、貴重な財産を守ることができるようになったのである。

チャン・ヌンは、こういった支援で生活の質が確実に向上



写真提供：オックスファム・オーストラリア 撮影：Glenn Daniels

したと考えており、もし支援が継続するならば、生活はより楽になるだろうと思っている。しかしその一方で、サンボーダム開発によって生活が困難になるのではないかと不安を抱いている。「もしダムが建設されたら、どこに行けばいいのか？」と考えている。機会があれば、ダムを作らないよう意見するつもりだが、もし「彼ら」が本当に建設を望むのであれば、地域住民がそれにどう対抗すればよいのか見当もつかない。

## 水と衛生：大きな一歩

開発途上国で、コストをかけず、技術的にも簡単な方法で、健康状態を大きく改善することは可能である。下痢はカンボジアにおける死因の第三位であり、特に5歳未満の子どもにとって危険なので、飲料水の質や衛生といった下痢の主要な原因をターゲットにすることで大きな改善が望める。サンフィン村では、オックスファムが全家庭にトイレと水をろ過する瓶を提供してきた。あまり「かっこいい」援助ではないが、生活の質を向上させる基礎的要件のひとつである。

病気の原因とその予防手段についての理解をそれぞれの地域の中で深めることも同じくらい重要だ。サンボーの村で健康意識に関するワークショップを行うこと、そして継続的に教育活動を担う村の医療ボランティアへの研修を行うことも、単純だが非常に効果的な健康改善の方法となっている。水と衛生に関して受けた援助について、ドムライ村の住民は次のように述べる。

「オックスファム・オーストラリアプロジェクトで勉強し、水をろ過する瓶を受け取った後、多くの家庭で下痢が予防された。河から直接水を汲んで使っていた時とは大違いだ。結果的に、多くの家庭が同じ行動をとるようになり、たいいてい家庭で水を沸騰させるようにもなった。下痢にかかる数が大幅に減るのを目の当たりにした。」

## スレイ・トゥレン村 サンボーストリー

サンフィン村やドムライ村と違って、スレイ・トゥレンはメコン河上にも、その近くにも位置していない。

## 彼らは森を奪っていく ボン・キエットのストーリー

53歳のボン・キエットは社会の底辺で生きている。彼女には子どもが5人おり、うち2人は結婚して独立した。3人は就学年齢にあるが、ひとりも学校に行っていない。家庭は貧しく、子どもたちは身体が弱くて学校に行くことができないという。少数民族のPhnong族で、クメール語も流暢に話すが、自分の言葉の方が落ち着く。ボン・キエットとその家族、そしてこの地域の住民は、河や水田ではなく森で生活している。ついこの前まで森の生活は豊かだったが、現在は、必要が満たされているとはとても言えない状況だ。



写真提供：オックスファム・オーストラリア  
撮影：Glenn Daniels

### 森の豊かさ

東南アジアの多くの少数民族と同様、Phnongの文化、農業、信仰は、森での移動式耕作や狩猟採集の上に成り立っている。ボン・キエットは米を栽培しているが、サンフィン村やドムライ村で見られるような水田での栽培ではない。森を切り開いた場所チョムカー(chamkar：畑の意味)で米を栽培し、その他にも様々な果物、野菜、塊茎作物を栽培しているのだ。伝統的な方法では、一つのチョムカーを2年から3年耕作し、次のチョムカーへ移動する。このようにして移動を続けて10年から12年ごとに最初の農地に戻ってくる。この仕組みにより、土壌の再生を促し、害虫問題を最小限に抑えることができる。

チョムカーの耕作のほか、森での狩猟にも多くの時間を割いている。時期にもよるが、1週間に2日から3日は森で過ごし、時には3日間ずっと家をあけることもある。森で

採集する林産物はいろいろで、きのこ、蜂蜜、ラタン(パーム)、小動物、かたつむり、葉草などがあるが、最も大切なのはタケノコである。

こうしたものは全て家族の消費用だが、国道7号線沿いの交通量が増加するに従い、売りに回す分も増えてきている。蜂蜜が一番儲かる産物で、たった2、3日の採集で10万リエル(25米ドル)も稼げる時もあるが、見つけるのが難しくなっている上に、特定の季節にしか手に入らない。きのこはそれほど儲からないが、安定した収入源であり、1日で約5万リエル(1.25米ドル)を稼ぐことができる。

彼らの食事の大半は林産物で、特にタケノコを食べており、米は少量だとボン・キエットは説明する。このような生活は、水田耕作よりも労力を要するし生産性も低い一方、順調であれば栄養的にはより豊かで、よりバランスのとれた食事をとることができる。しかし、もはや順調に機能していないのが現状だ。ここ数年、販売を目的として林産物を採集する人が増えてきている。その大きな原因が、この地域への輸送アクセス改善に伴って開いた市場である。より一層採集が進み、手に入る林産物が急速に減ってきているとボン・キエットは指摘する。5、6年前なら、1時間でもかご10杯分のきのこがとれたそうだが、今ではかご1杯とればありがたいという。

2007年、予想だにできなかったことが起きた。ある日、ボン・キエットが森道をチョムカーに向かって歩いていると、兵士の一団に遭遇した。兵士たちは彼女にむかって、「ここは通り抜け禁止だ。この土地はプランテーション企業のものになったので、もし不法侵入で捕まったら、逮捕、投獄、そして罰金を科される」と言ったのだ。ボン・キエットは愕然とした。彼女の土地や森が私企業に与えられたなどは聞いていなかった。補償の申し出もなかった。

それ以来、別のプランテーション企業2社に対して、スウントウレンのPhnong族が耕作し利用してきた土地と森林内の広い土地が与えられた。これまでの問題といえば深刻な食料の減少だったが、それが突然、危機的状況に変わったのだ。

### 現在そして将来の生活

ボン・キエットとその家族の生活は、たいていの人からみればこれまでも貧しいものであったが、ここ数年で悪化している。ボン・キエットは、10年前の生活は「楽だった」と言う。しかし、今は非常に苦しい。彼女とその家族はかろうじて生き延びている。

ボン・キエットは、現在、数区画のチョムカーと森林の中の狭い土地だけを利用することが許されており、これで暮らしていけるように願っている。しかし、この土地さえも彼女から奪い取られるだろうという恐怖心のほうが、将来にむけた希望よりもずっと大きい。

## 生き残るための戦い

### オンパル・ニョーンのストーリー

オンパル・ニョーンは Phnong 族の青年で、彼の民族の現状について怒りを覚えている。彼と妻には 5 歳未満の子どもが 3 人いて、自分たちの将来が危機に晒されていることを痛感している。オンパル・ニョーンは Phnong 族の長老たちを尊敬しているが、将来彼ら全員を脅かすような新勢力に対しては、より若い世代がリードしなければならないだろうと考えている。



写真提供：オックスファム・オーストラリア  
撮影：Glenn Daniels

### 虐げられた人々の声

ボン・キエットは、森と農地が奪い取られていく理由や経緯を必死に理解しようとしている。オンパル・ニョーンは、実際に何が起きているのかを理解し、彼の民族の権利を守る方法を考え出すことを職業にしてきた。

彼は、私たちに対して、スウントウレンの人々に突然突きつけられた土地をめぐる紛争の詳細を説明してくれた。自分たちの生活が危険に晒されていると初めて気づかされたのは、2007 年に兵士たちが森の一部へのアクセスを禁止したときだった。オンパル・ニョーンは、クラチエ州政府が、彼らの森をトン・ミン社 (Tong Min Co.) という中国企業に渡し、同企業がキャッサバ、チーク、アカシアの植栽や製材工場の運営を計画していることを知った。この企業は 9 千ヘクタールの土地を得て、すぐにその一部をブルドーザーで整地し始めた。

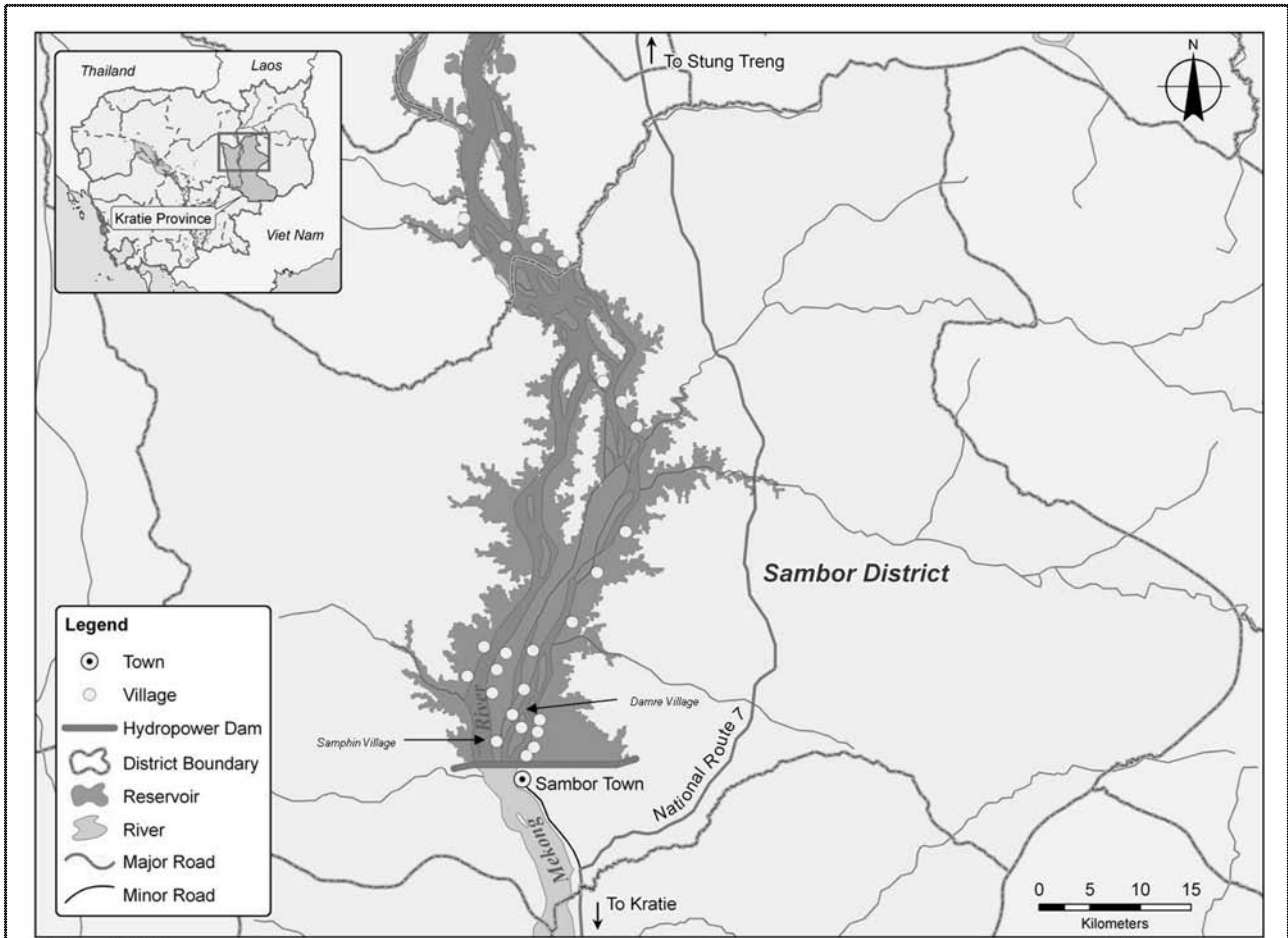
2008 年には、ソム・コイ・テイ (Som Kuy Tey) というクメール系の会社が別の土地の権利を主張するようになった。またしても、初めて住民たちがこのことを知ったのは、ブルドーザーが現れて土地を切り開いたときだった。このときは、住民たちも以前に比べて心構えが出来ていた。150 人の村人はすぐに集まって、ブルドーザーを止めに行った。彼らは平和的にデモを行い、無理やりではあったけれども、運転手を止めた。事態の収拾がつくまで企業に撤退するよう交渉をし

ていたコミュニンの長がいたので、オンパル・ニョーンたちはこの人物に会いに行き、助けを求めた。同社は千ヘクタールの土地の権利を主張していたが、住民たちの行動により、わずか百ヘクタールが切り開かれただけで済んだ。

この小さな成功の後、オンパル・ニョーンは土地をめぐる争いがどれほど苦々しいものかを知ることになるのである。オンパル・ニョーンたちが事態の進捗を見守る中、プランテーション企業は交渉を任された村の長老をクラチエ町に呼び、2、3 日間の交渉を行った。後で分かったことだが、この長老は、この企業にさらに 6 百ヘクタールの土地を切り開くことを許可する文書に村を代表してサインをしていたのだ。それも、なんの補償も無しに、である。彼はすぐに村での権威を失ったが、被害はすでに生じていた。

このために、住民たちは新たな戦いに直面することになった。我々がオンパル・ニョーンと話したのは 2009 年中旬だったが、その一か月ほど前、多くの住民が、スウントウレン周辺の水田に水を供給している貯水池近くでキャンプしている男たちを目撃したという。住民たちは、貯水池と森を流れる川の間にある土地 (約 3 百ヘクタール) はすべて 3 つ目のプランテーション企業のものだと聞かされた。この土地は、オンパル・ニョーンの祖先が埋められている土地なのだ。さらに、灌漑用貯水池はこの地域の唯一の水源で、援助プロジェクトを通じて、オーストラリア政府の資金でオックスファムが作ったものだった。この貯水池さえ、もはや住民のものではないと言われたのである。

オンパル・ニョーンは、この新たな脅威の重要性をよく理解している。この事態が意味するのは、彼らの生活様式である移動式耕作が不可能になるということである。オンパル・ニョーンたちは、このプランテーションの計画の詳細を未だに知らず、これまで聞いた情報が正しいかさえ分かっていない。今回は少なくとも事前警告があったが、過去 2 回の事件が踏襲されるなら、その行く末も定かではない。



Data Source: DIVA GIS

地図製作：オックスファム・オーストラリア

## サンボー水力発電ダム

2006年10月、カンボジア政府は、中国南方送電網と、サンボー地区における水力発電ダムの実行可能性調査を開始するための覚書に署名した。このダムの目的は、カンボジア国内でのエネルギー供給ではなく、タイやベトナムへの売電である。サンボーは比較的平坦な土地であるため、ここでのダム建設には、長さ18キロメートル、高さ56メートルの壁と、620キロ平方メートルの貯水池が必要となる。これで2,600メガワットの発電能力になるとされる。

本書の執筆時点（2009年11月）では、プロジェクトがどの段階まで進んでいるのか、そもそもプロジェクトが実現するのにかえもはっきりしていなかった。ダムの実行可能性や環境社会影響に関する正式な文書も公開されていなかった。しかし、ダムの影響、特にメコン河漁業と貯水池地域から移転させられる人々に対する影響が甚大だという点で、研究者、開発従事者及び政府関係者の意見が一致している。

### 漁業への影響

サンボーダム計画地は、メコン河流域の魚の回遊ハイウェイの中心に位置し、トンレ・サップ湖とセサン、セコン、スレポック川の間にある。メコン河のこの地域では、世界でも最も生産性の高い陸水面漁業が行われており、驚くほど多様な生物（1,300以上もの魚種）が生息している。本書のストーリーが示すように、こういった魚は多くのカンボジア人にとって重要な食料であり、収入源である。主な食用魚は回遊する性質をもつ。

メコン河の水資源管理において最上位にあるメコン河委員会は、計画中のサンボーダムが移動性の魚種に甚大な影響を及ぼすことを認め、その影響を十分に緩和することは不可能に近いとしている。

こうした意味で、計画中のサンボーダムは、サンボー地区の住民だけでなく、何百万もの人々に影響を与える可能性がある。



## 移住の影響

途上国で、ダム建設地からの大規模な非自発的再定住はこれまでも行われてきたが、そうした事例を見ると、移住者に深刻な悪影響を及ぼさずに再定住を行うのは極めて困難であることがわかる。世界ダム委員会は、世界中でダム関連の再定住が何百万もの人々を「貧困に陥らせ、苦しめてきた」と指摘する。

サンボーでも、ダムが建設されれば、おそらく1万9千～2万人が移住を強いられるだろう。サンフィン村とドムライ村の住民は確実に移住させられる。

大規模な再定住プログラムが行われるかもしれない中、多くの深刻な疑問、特に住民の移住先についての疑問が生じている。サンボーダムに関連して挙がっている再定住の候補地のひとつは、サンボー町の東北東約20キロメートルにあるプレア・メア山だ。この山は森林地域で、過去20年間さかんに伐採が行われてきた。現在、唯一のアクセス方法は伐採用トラックのみである。

プレア・メア山は商業利用が許された土地に囲まれているので、約千ヘクタールの土地が再定住に「利用可能」と言われている。プレア・メア山を農地化するには、非常に大規模な伐採と整地が必要になるだろう。仮にそれができたとしても、土壌は砂や岩ばかりで、農業にまったく適していない。この地域には恒久的な水源もなく、マラリア蚊も多い。既存

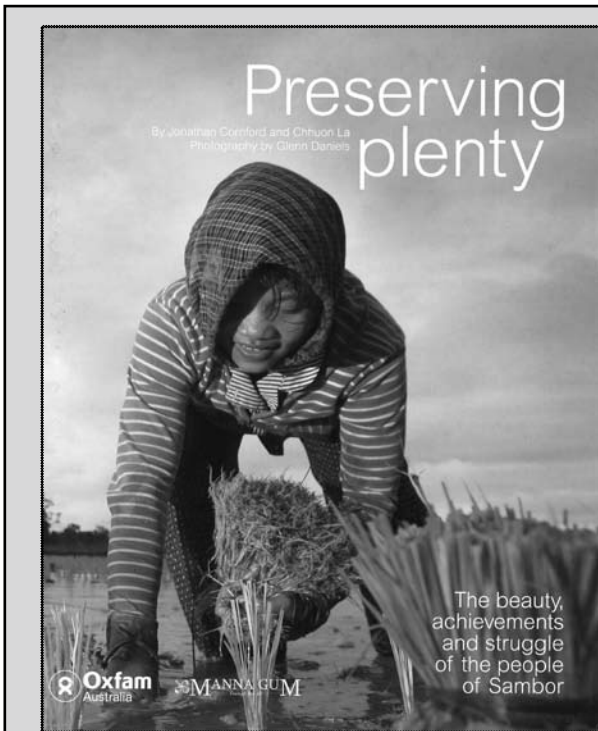
の施設から離れているため、ここでの再定住には、学校、医療施設、質の良い道路の整備等に対する多額の投資が必要だろう。

農業に適さないという点に加え、プレア・メア地域は、2万人が再定住する土地としては狭すぎる。サンボー地域の大部分、そしてカンボジア全体が土地をめぐる紛争で悩まされていることを考えると、強制的に移住させられる住民たちが正当に扱われるとはとても考えられない。

## さいごに

本プロジェクトは、多くの方々の惜しみない協力によって実現しました。特に Som Sovanna、Glenn Daniels、Michael Simon、Lucy McAndrew、David Cook、Cathy Cook 氏に感謝いたします。

(翻訳：舎川正美 草部志のぶ 文責：メコン・ウォッチ)



Preserving Plenty の原典はこちらを参照されたい。  
<http://www.oxfam.org.au/resources/filestore/originals/OAus-PreservingPlenty-0210.pdf>

### オックスファム・オーストラリアについて

オックスファム・オーストラリアは、貧困や不正と熱心に戦う人々のグローバルな運動に参加している。メコン地域では、農村での生活の改善と保護、そして住民が依拠する自然資源の保全を目的として活動している。メコン地域の環境的・社会的多様性が守られ、将来世代に亘って維持されるよう、地元のコミュニティーを直接支援し、他の市民団体と協力している。詳細は [www.oxfam.org.au](http://www.oxfam.org.au) を参照。

### Manna Gum について

Manna Gum は、独立したキリスト教 NPO であり、すべての人が十分なものを持つ世界という理想をもって活動している。私達は、援助と開発について考え、地球と人々に対して我々が共有している責任をより強く意識することを目的としている。Manna Gum は、非宗教・宗教の境界を越えて、研究、政策提言、教育活動を行う。

詳細は [www.mannagum.org.au](http://www.mannagum.org.au) を参照。